

第三章

玄関付近から何かが聞こえてきたのです。

耳をすませてみると、誰かが「バ」「ワ」といった単体の言語を連呼しているような、言葉とは言い難いものでした。すぐさま、私は窓からおそるおそる覗いてみると微かに201号室の女性がしゃがみ込み植木鉢に水やりをしている姿が伺えました。

窓からの角度で女性の頭頂部しか見えなかったのですが、間違いなくその女性から発せられていることはわかりました。普段の様子からは予想もできぬその言動に背筋が一瞬ゾッとしました。

また、それ以降も度々同じ状況を見かけるようになり、それから1か月経たない間にその女性は引っ越されて201号室は空室になっていたと記憶しております。

いったい何があったのか、元々そういう精神的な病気をお持ちだったのか、当初はそのくらの気持ちであまり深く考えはしませんでした。

自宅にいる時間が増えると今まで見えていなかった状況に出会うことも多く、もう隣の203号室の男性についても引っかかる事があったのです。

私が正社員で勤務をしている時は、出勤時にすれ違う程度でその男性はいつもスーツ姿、笑顔で挨拶を交わしてくれるという程度の印象でしたが、私が自宅で過ごす時間が増えたため新たな一面が見えるようになったのです。

その男性は毎日、ほぼ決まった時間に仕事から帰ってこられていました。休みの日は毎朝早くに掃除機をかけられたあと全く家から出かけないという生活で常にテレビ音が1日中隣室から聞こえていました。仕事以外は全く外出したくない人なのかと思う程度ではありましたが、当時の私と同じくらいの年齢、乗られている車も立派な乗用車で身だしなみも上品なスーツを着られており、ただ4畳半程度の狭い部屋で決して居心地がいいとは言えない自宅だった為、不思議な感じはしていました。

また、私はその男性が仕事から帰宅される時の姿が強く印象に残っております。その男性の表情が出勤時の笑顔とは全くの別人とも思えるほど険しい表情なのです。目つきも鋭く、車から降りたあと小走りで部屋に帰って行く。すれ違いに挨拶もできないほど表情が朝と激変しており、私はその時間帯にあえて会わないように時間をずらしていたくらいでした。

このように、自宅での勉強生活が始まってから今まで見えなかった状況も垣間見るようになると同時に、私自身にも何か違和感ともいえる感覚が出始めてきたのです。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

つづく